

朝丘雪路さんと伊東深水先生

二十一回生 大久保 千尋

満開の桜の下、宝塚歌劇団百年記念の会場である宝塚大劇場にむかった。報道陣が取り巻く入り口を少々気後れしながらも通り抜けると懐かしい同級生の顔が並んでいた。出席を渋っていた私を心配して待っていてくれたのだ。

行き交う着物とドレスからはコロンの香りがこぼれ、年を重ねた先輩も後輩もみんな年を忘れアノ頃に戻っていた。とにかく会場は華やかで賑やかだった。「キヤーツ！」が枕詞の様に再会を喜ぶ挨拶とお喋りが入り交じる劇場内の客席に和服姿の朝丘雪路さんを見つけた。

思わず「朝丘さんー！雪絵さんー！」。大きな声で叫んで手を振った。

声は届いた様だ、振り返へって私を見つけると大きく手を振って応えてくれた。無我夢中で駆け寄った。古代紫と白のグラデーシヨンの地に草花を描いた豪華な訪問着は朝丘さんにとてもよく似合い艶やかであった。

「あなたの事よく覚えているのに名前が思い出せない、でもアナタ昔のマンマよ！」。

「朝丘さんこそお変わりなく！」。

「ヤーね、お互いにお世辞云っちゃって」。

開演間際の限られた時間の中で近況報告、深水先生の事、会話が思いっきり弾んだところで場内のスポットが消えファンファーレが鳴り響いた。確か43年振りの束の間の再会だった。

東京に来て間もなくプロダクションからの仕事で朝丘さんの舞台に参加させて頂く事になった。5年上級生であった朝丘さんは私達の入学とはすれ違いに退団なさっていたので宝塚の舞台はもちろん、お目にかかった事は一度もない。

顔合わせのお稽古場で初めて間近で見る朝丘さんは意外だった。無口でおっとりとして、スター特有の我儘もなく、着る物、持ち物、立ち振る舞い全て女優さんと云うよりも育ちの良いお嬢さんだった。マネージャーはじめ廻りの人は「雪絵さん」と呼んでいたが私は先輩として「朝丘さん」で通した。

お稽古が始まると、驚きの連続だった。

「雨が止んだら」が大ヒット中で、テレビ、映画、舞台、トーク番組、歌謡ショー等々、八面六臂の毎日である、

振り付けの現場に立ち会えない朝丘さんの為に付き人が「踊りの振り」を書き留めて伝えていたのだが、そのメモをサッと目を通してだけで30分以上ある「振り」が完璧に頭に入っている。直ぐに音合わせをしても何の狂いも無く「振り」の手順ではなく完成に近い「舞」を舞う事が出来るのだ、実にサラリと。

この人天才なのか、スターと呼ばれる人はこう言う人達の事を云うのか、場数を踏んだプロの技なのか、芸能人らしいテキパキではなく、おっとりお嬢さんそのまま、何事もなかった様に次々とこなしてゆく超人的なその人を遠くから飽きる事なく眺めていた。何時も振り付けは花柳芳次郎さん（現在の花柳壽應氏）が主で日本物の衣装で洋楽を踊る。朝丘、芳次郎コンビの最も得意とするところだったと思う。

特に印象に残っているのは当時流行っていた映画音楽「引き潮」を海女の衣装で夏の小島の出来事を気だるく、切なく、官能的に踊ると云うよりも演じていた、凄みがあった。振り付けも素晴らしかった。

公演の度ごとに声を掛けて下さり多くの劇場、地方公演、シヨウ等ご一緒した。

穏やかであるが凜とした深水先生の前に私はかなり緊張していた。

ボンボンと深水先生が軽く手を叩かれると静かに襖が開き、三つ指をついたお手伝いさんが控えている。日本にまだこんな風習が残っていたのだ、映画のワンシーンの中に迷い込んでしまった様な不思議な時間に吸い込まれていった。

「話しかけても大丈夫です、何を尋ねても平気です、そんな事になさらない先生ですから」、先生のお弟子さんが声を掛けて下さったが、緊張はなかなかとけなかった。

質問なんてとんでもない、筆の運びを傍で見せて頂くだけで十分過ぎる。

静かな時が流れた。

先生がポツリポツリと話を始め出してくださった。記憶の糸を懸命に手繰って下さっているかの様に。聞き取りづらい処もあったけれど聞き返すより話の流れを止めたくなかった。

筆の話、膠の事、金箔の塗り方、師である鏑木清方の思い出の話。

新派の花柳章太郎さんの写真が化粧前に飾られた楽屋だったと思う、

「絵が好きナンですつてネ？私、本当は絵描きさんになりたかったの、パパに会ってみたら？」。突然の事でドギマギしてしまった。

パパって日本画家の巨匠伊東深水先生の事である。後で聞いた話だけれど 絵描きさんになりたかった朝丘さんに女流画家の道は厳しいと深水先生は強く反対なさったそうである。

それから間もなくお弟子さんのK子さんの案内で返子のお宅へ向かった。

小高い丘全体が庭とお屋敷である。玄関の左側には先生の作品でも見かけた珍しい文様に編み込まれた竹製の大きな垣根が青葉の庭によく映えていた。

広い土間を上がり奥の奥、その又奥の座敷に通されると多分この座敷がアトリエなのだろう。

和服姿の深水先生が静かに筆を運んでいらした。世の中のアクを綺麗に洗い流した様な楚々とした美しい老青年だった。

何の威圧感もなくズーと昔から存じ上げているかの様な優しい暖かさが伝わって来た。そうだ！この感覚、朝丘さんと似ている。

「築地明石町、いい絵だネエ、だから僕、唄を作ってしまってますね」。

「私も大好きです、先生のおつくりになった小唄も存じてます」。かろうじて声が出た。

「築地明石町」は、鏑木清方の代表作である。

そして伊東深水作詞「築地明石町」も小唄の世界ではよく知られている。

江戸小紋の着物に黒い羽織、夜会巻きに素足に下駄、背景に幻の如く浮かび上がる洋船、そこはかとなく異国の妖しげな香りがしないでもない。

築地明石町は外国人居留地であった。

この人はラシヤメンかも知れない、それとも一世を風靡した名妓だったのか、没落した由緒ある家の娘だったのだろうか、羽織の家紋が何か云いたげである。

嘗て、こんな他愛のない想いを巡らせていた私は同じくこの絵が好きだった父に話すと

「あの船は外国船じゃないよ、日本の商船じゃないか、絵を見てごらんナントカ丸って船に日本名が書いてあったよ」。

あつけなく私の妄想は中断してしまった。

師の鏗木清方同様、築地にかかわりの深い深水先生は誰よりもこの作品を理解してらしたに違いない。

「湯気」という先生の作品に話が及んだ。若き日の先生の代表作である。

「雑誌ではよく存じ上げていられるけれど・・・。」と言葉が終わらないうちに

「今、この家の倉庫にありますよ」。息が止まる程吃驚した、嬉しかった、どうしても一度観たい作品だったから。

倉庫から出された絵は床の間に立てかけられた。きつと、思い入れの深い作品で自宅に大切に保管されていたのではないかと。

「僕、おませさんでネ、この人彼女なの。日本髪にも色々流行りがあったネ、佐渡屋が新しい鬘を売り出したので早速買って彼女に結ってもらったの、その時の流行りの鬘は幅が細くて高いの、絵をみれば分かるでしょ、これがその時の一番流行りの日本髪なの」。立ち込める湯気の中、浴衣の袖を濡れぬ様に口にくわえて手拭いを絞っている。描かれた女性がこよなく初々しい。

で中心の受骨に何色かの糸が編み込まれ美しい文様をなしている。

絵の材料になるかも知れないと知人に贈られたその時、この傘の下に座るのは「玉菊」しかないかと決めたそうである。

遊女「玉菊」の話は知らなかった。

美しく芸事に秀でていて、遊郭の人達に愛され慕われていた。

大きな後援者がついていてその贅沢さ、豪華さは後の語り草になった程であるが、好きなお酒が仇となり若くして亡くなってしまった。

丁寧に説明をしてくださる先生の話を繋ぎあわせると以上のような物語であった。売られてきた子が花魁まで上り詰め花の絶頂期に逝ってしまった「玉菊」へのレクイエムなのだろうか。

お手伝いさんが遠慮っぽく灯りをつけた。日はすっかり暮れていた。

思いもよらぬ長居をしてしまっていた事を詫び失礼

愛しく思う人に流行りの髪型を結わせその姿を描く、淡々と語られる先生の言葉の端々に、抑えきれぬ青春の熱い息遣いが伝わってきた。若く美しい彼女への思いが画面一杯に塗られられた筈である。

「彼女」と幾度となく敢えて表現なされた先生、丸鬘は妻の証、娘朝丘さんへの父親としての遠慮のマナーだったかも知れない。

床の間に、銀製だと思ふ丸みを持った四角い大ぶりの蓋の無い箱、不思議な置物が置かれていた。

「いいでしょう、骨董屋も何か分からない物らしい、床の間に置くようなものではないと云うのだけれど面白いでしょう」。

この置物が大変お気に召したらしく何がそんなに面白いのかを詳しく話を聞いた筈なのに全く思いつき事が出来なく残念に思う。

この後、遊女「玉菊」を描いた作品も倉庫から出して見せて頂いた。大作である。

豪華な傘の下に「玉菊」がお酒を嗜んでいる。他の作品と色彩も顔立ちもかなり違う。いつ制作されたのか聞く機会がなかった。

端折傘の様に端が折れてはいないが大振りの赤い傘

しようとすると引き止められ、まさしく山海の珍味のおもてなしを受け唯々感動と恐縮の至りで、おいとました。

その日から約1年後、朝丘さんと地方公演の最中、深水先生は亡くなった。

この公演では津川雅彦さんも一緒だった。

あれから何十年の歳月が流れてしまった。

合掌なんて書かない、記憶の中ではお二人とも元気だから。

耳をすますと、かすかな朝丘さんの歌声が聞こえてくる。

「雨が止んだら、お別れなのね……………」

大久保千尋さんから「築地明石町」について以下の様なご連絡を頂きましたので、追加させて頂きます。なお、三部作として「浜町河岸」「新富町」の二点も同時に公開されます。(編集部)

追伸

今朝(6月25日)、朝刊を開くと第一面に

「東京国立近代美術館は24日、日本画家鏑木清方(1878～1972)の代表作で、44年間所在不明だった美人画「築地明石町」1927年を新たに収蔵したと発表した。11月1日～12月15日特別公開」の記事が載っていた。

この作品が44年間所在不明だったとは知らなかった。「築地明石町」が展示されるとごく自然に毎回会場に足を運んでいた。そう云えば最近余り目にする機会が無かった様に思う。

居留地と云う当時では超モダンな特殊な場所を背景に、色街の香りを仄かに漂わせ儂げで今にも消え入りそうで在りながら凛としている。

「貴女は一体何者なの？」

見る人にそんな思いを抱かせながら、日本人に一番愛された作品かも知れない。日本の人物画の中でこれ程注目された作品も珍しい。

「築地明石町」の妖しい謎の魅力に私は何度か会場に足を運ぶ事だろう。

千尋

参考

東京国立近代美術館

東西線竹橋駅下車1b出口より徒歩3分

月曜日休館(11月4日は開館・翌5日休館)

千代田区北の丸公園3-1